

## 特別寄稿

昨年 9 月、大河ドラマ「真田丸」放映中、母校の創立以来伝わる校歌および数々の歌の中で、上田城と真田幸村が如何様に歌詞の中に登場したか、また時代により変遷した様子に興味を持ち一文に纏めた次第である。(関口貞雄)

関口さんの原稿は長文なので、4 部に分割して掲載します。

NO1 では、はじめに、(1)寮歌、(2)信州男児の歌、(3)凱歌、(4)おぼろにあけし

NO2 では、(5)校歌、(6)学友会歌、(7)運動部の歌と応援歌、(8)上田中学校報国団団歌

NO3 では、(9)終戦とその後の歌、おわりに

NO4 では、追記 県歌“信濃の国”に登場しない幸村

## 「上田中学、高校校歌等に歌われた上田城と真田幸村」(NO1)

関口貞雄(48期、関西同窓会)



今年の 9 月、関西同窓会総会でスピーチする関口さん

### \* はじめに

平成 28 年(2016年)1月8日、NHK 大河ドラマ「真田丸」の冒頭シーンで母校上田高校の校門が登場し、校歌がバックに流れた。

2 関八州の精鋭を ここに挫きし英雄の  
義心のあとは今もなほ 松尾が丘の花と咲く

戦国の乱世を生き抜いた真田家 3 代の物語は池波正太郎の「真田太平記」を筆頭に幾度か小説となり、映画、テレビ・ドラマ、舞台ドラマとなった。

そこで母校に伝わる校歌、寮歌、応援歌等の起源、そこに登場し歌われている上田城と真田幸村をピックアップして検証し、時代の流れによる変遷を辿って見ようと思う。



上田城(大手門と東櫓)



大手門



真田神社

## (1) 寮歌

明治32年(1899)4月、長野県中学校上田支校が発足し学生のための寄宿舎が設立され、寮歌が作られて盛んに歌われた。(作詞 宮沢義喜 作曲 山下信太郎)

- 1 信濃の空に東風渡り 春の息吹きをもたらせば  
浅間の山もかすみこめ 千曲の流れ水ゆるし
- 2 昔真田の城のあと 今は文よむ窓のうち  
燈火の影に英雄の 面影偲ぶ春のくれ
- 5 昔松尾の城のあと 今は文よむ窓のうち  
燈火のもとに英雄の 面影偲ぶ秋のくれ

## (2) 信州男児の歌

明治35年(1902)3月、長野県上田中学校第1回卒業式のために作られた歌で、卒業式で発表されて歌われた。(作詞 田中常憲 作曲 田口信太郎)

- 1 東千山の嶮により 西方岳の雲によじ  
六十余州の唯中に 高く建てたる国一つ  
凶南の翼うちひろげ 見下ろす姿の雄々しきよ
- 3 亡君の遺孤を手に捧げ 雲なす大軍うちはらい  
誠忠孤剣を掲げて なにわの花と散りにける  
千古稀なる大傑士 幸村この地に育ちたり
- 4 維新の大業肩におい 金鞍馬上鞭絶たず  
魂西陸に行きかえり 文化の花をもたらせし  
日本開化の率先者 象山この地に生まれたり
- 6 あな勇ましや我が祖先 祖先のあとをたどりつつ  
みがきし健児の心胆は 鬼をも走らす剛毅あり  
何をかおそれんいざ進め 狂爛万理わが前途

武の鑑として真田幸村を取り上げ、大阪城での奮戦と死を「千古稀なる大傑士」と讃えている。松代出身の佐久間象山を学問の鑑として歌っているが、題名が信州男児なので、象山が少年期に上田の毘沙門堂で括文禅師に教えを受けた縁で登場したものである。



大 阪 城 (天守閣と石垣)



大坂城天 閣

### (3) 凱歌

大正 8 年 (1919) 10 月、全国中学校陸上競技大会 800m で田村民治選手 (20 期) が優勝した。その偉業を讃えるためにこの凱歌が作られ、上田駅で歌われた。(作詞 吉村武生)

- 1 夕陽千曲の水の面に 映えたる血潮輝きて  
     躍るや絶えぬ歓びの 流れにひびく陣太の音  
     聞けや胸血のたぎる声 誉れの兜我得たり
- 2 黙示の色に溢れたる 浅間の峰の空高く  
     五色の旗のたなびきて 夕陽の四方を覆ふとき  
     見ずや誉れのこの旗を 永く我が手に保たなん

戦後間もなくの昭和 24 年 (1949) 7 月、大阪なかもず競技場で行われた全国高校陸上競技大会 (インターハイ) で、48 期の松野信昭君が 400m で優勝した。戦後の復興期であったから、上記の田村選手のように上田市の大ニュースとはならず、朝礼で校長先生から報告と労いの言葉があっただけと記憶している。卒業後松野君は慶応大学へ進学し、陸上競技部で活躍した。

### (4) おぼろにあけし

「凱歌」と同じ大正 9 年 (1920) 頃、校歌より先に作られた歌である。  
(作詞 松平忠久 作曲 吉村武生)

- 1 おぼろに明し 春たけて 時の黙示のほほえめば  
     今もえいずる 若緑 我が揺籃の時めくを
- 2 宇宙のさとし 身にうけて この揺籃を立ち出でし  
     幾多の健児 高殿に 霊旗を高く 打ちたてむ

(以下、NO2 へ)